

令和6年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

県立相模向陽館高等学校長

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月24日実施)	総合評価（3月31日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	○生徒の実態や社会情勢に合わせたカリキュラムマネジメントの促進 ○「わかりやすい授業」の組織的な展開による基礎学力の定着と主体的で深い学びの実現	①高卒認定の扱いや3修制希望生徒の増加に対応する仕組みを構築する。 ②ユニバーサルデザイン化されたわかりやすい授業づくりに組織的に取り組む。 ②生徒による授業評価の内容を活用し、授業力の向上に繋げる。	①検討を開始して、具現化できるところから進めていく。 ②時間や場の構造化、視覚化やスモールステップ化、ICTの活用等を積極的に取り入れていく。 ②前期の結果を職員で共有し後期で改善した結果を全員で利活用する。	①妥当なカリキュラムを作成できたか。 ②ICTの活用状況、授業改善の状況等 ②生徒による授業評価の結果の「よい」の割合の変化	①3修制希望生徒向けに、部間併修とトライアルタイムの履修制限の変更をおこなった。 ②年度当初の職員研修で本校生徒の現状を共有した結果、授業への取り組みは概ね前向きになり、生徒による授業評価も80%が概ね良好以上であった。	①生徒の特性を踏まえた、授業環境の整備及びICTの活用を進める。今後も生徒の意欲を引き出せる授業を実践していく。 ②生徒による授業評価の質問項目を変更し、より詳細で効果的に分析できるようにする。	①向陽館高校がもつ役割を果たしていることは十分理解した。公立高校のメリットをもっと前面に打ち出し、そのことを中学生に発信することが課題である。 ①一人一台端末やICT利活用はかなり進んでいることがわかった。	①生徒のライフプランを支援できる教育課程を編成している。より柔軟な履修プランが作成できる仕組みづくりが課題である。 ②ほぼ全教員がICTを利活用できるレベルになっている。	①担任及び学事Gが、個に寄り添った履修指導ができるよう、各種情報を共有する。 ②有効活用している教員のノウハウを研修等を通じて共有する。
2	生徒指導・支援	○社会で生き抜くために必要な力を身につけられる支援の推進 ○外部資源を最大限に活用した組織的な相談体制・支援体制の充実 ○主体的・積極的な活動の支援体制の確立	①様々な場面で、自ら課題を発見し、学び、考え、判断し、行動する力を身につけさせる。また、自分の行動・言動に責任が、持てるようにする。 ②支援を見える化し、学校全体で支援する体制を強化する。 ③行事・部活動の活性化を図る。	①サポートドックの結果を支援に反映させる。 ②コミュニケーションを図る機会を多く設定し、通常の生活の中で振り返る。さらに回を重ねることとで成長を図る。 ③体育祭・文化祭・球技大会をコロナ前以上のレベルで実施する。	①様々な場面で、「生きる力」を身につけさせられたか。 ②支援に繋がった件数及び生徒の変化をサポートドック等で確認する。 ②サポートドックを活用して年度途中や年度末で心の成長の度合いを調査する。 ③アンケートで生徒の満足度を確認する。	①生徒たちがTPOをわきまえた行動等をしなければならぬと考える生徒が増えた。 ②2回のサポートドックを通して、支援体制を整えた。 ③文化祭は飲食団体を増やし活気が戻ったことで、8割以上の生徒が満足と回答した	①目標達成のきっかけをつかむのに相当の時間を要した。教員全体で積極的に関わる必要がある。 ②各種アンケートをサポートドックへ統合するにあたり、質問内容等を精査する。 ③行事で準備・片付けに関わる生徒を増やす工夫が必要。	①②生徒に生きる力をつけるという目標は達成している。登校していない生徒としている生徒間のギャップを縮める対策が必要である。 ③生徒が活躍する場面が増えたことは評価できる。e-スポーツなど生徒が登校したくなる部活動をつくるという工夫も検討してほしい。	①生きる力をつけるべく、物事の善悪を伝えることを徹底したが継続することが難しい生徒が多いことが課題である。 ②カウンセラーによるプッシュ型面談を要する生徒が多いことが課題である。	①担任によるマンパワーだけでなく、必要に応じて年次で組織的に対応する。 ②相談が集中する時期にSC、SSWを集中的に配置して面談を実施し解決に努める。
3	進路指導・支援	○社会的・職業的な自立を果たす組織的かつ計画的なキャリア教育の展開 ○必要な資質・能力を身につけ、たくましく社会を生き抜く力の育成	①生徒が、自ら積極的に進路選択を行い、希望する進路の実現を支援する。 ①外国繋がり・多文化生徒の進路支援を強化する。 ②授業をはじめとする様々な場面を通じて、進路意識を高める。	①担任・グループ及びSCがチームとして面談及び説明会を開催する。 ①ガイダンス・サポート体制を充実させる。 ②様々な場面で生徒自身の将来との結びつきを意識させる。	①ガイダンス・説明会の回数・参加者数と生徒アンケートでの評価 ①進路実績 ②アンケートで生徒の満足度を確認する。 ②各年次との連携が図れていたか。また支援事例や支援のノウハウについて共有できたか。	①職場体験・各種の進路ガイダンスを開催し、「キャリア観」を育成できた。 ①課題がある生徒の進路実績は前年並みを維持できた。 ②各種ガイダンス等の満足度はほぼ100%であった。	①就労条件や経済的課題に対する支援のノウハウを共有できる仕組みを構築する。 ②卒業後に不安を抱える生徒に寄り添った進路支援を継続する必要がある。	①②さまざまな説明会や教員の支援で生徒の進路を実現させてことは高く評価する。次の課題は、療育手帳を有する生徒の就労支援をどうするかである。特別支援学校のノウハウを活用することも研究してほしい。	①SCC・担任による進路相談で生じた生徒の不安を、全体で協力して解決できた。外国つながりの生徒や手帳を有するなどさらなる支援が必要な生徒の対応が課題である。	①座間支援学校分教室の手法も参考にしながら、向陽館スタンダードを構築するという意識でキャリア支援に取り組む。
4	地域等との協働	○積極的な情報発信と地域との連携による信頼される学校づくりの推進 ○地域を通した社会と関わる力の育成	①情報発信の方法を工夫する。特にHP・SNSを使わない情報発信も模索する。 ②地域・社会に貢献する意識を醸成し、生徒の地域と関わる活動を支援する。	①地域の掲示板、回覧板を活用して、対地域イベントの開催を告知する。 ①地域に対し、文化祭等の行事の周知を行い、開放された学校にするとともに、学校を知ってもらう機会を増やしていく。 ②地域貢献デーの実施	①告知の回数 ①イベントの回数及び来校者数 ②地域・社会貢献の意味を生徒に十分に伝えられたか。 ②地域代表の意見	①今年度、初めて近隣自治会の回覧板を活用した広報を行った。近隣住民の文化祭来場者が例年より増加した。 ②ボランティア活動の本来の意味を確実に指導しながら取り組ませることができた。	①新着情報の適時適切な更新は引き続き実施する。 ②主体的に他者の力になろうとする生徒を適切に指導し、ボランティア活動の意義を浸透させる。	①ターゲット設定が不十分である。フォントや紙面構成に工夫が必要である。 ②地域清掃などのボランティア活動では、一生懸命取り組んでいるというアピールが足りない。	①地域への広報も有効であることがわかったので、ターゲットを意識した戦略で臨む。 ②単位取得を目的としたボランティアも少なからず存在する。	①フォントや紙面構成の工夫など地域への広報はターゲットを定めて展開する。 ②正しいボランティアの姿勢を理解させる。
5	学校管理 学校運営	○事故不祥事防止・防犯・防災等の意識を高め、生徒の安心・安全な学校生活を確保 ○組織的な活動による学校としての一体感の醸成	①教職員が安心して働ける職場づくりを行い、相互理解から事故・不祥事を防ぐ。 ②職員研修を通じて教員相互の意識向上を図る。	①衛生委員会などで環境改善のための方策を確認・実践する。 ②事故防止研修において、協議・意見交換の場を設定し、相互理解から意識向上に結び付ける。	①職場環境づくりはストレスチェックで評価及び検証を行う。 ②意識調査及び事故・不祥事ゼロの達成度を観点とする。	①これまでエアコンがなかった部屋に設置し、環境を改善した。 ②具体的な事故不祥事の実例を使った不祥事防止研修及び人権研修会を設定し、全職員で意識の更新を図った。	①職員が入れ替わっていく中で、職場の同僚性を維持できるかが課題である。 ②業務を適正に配分で、特定の教職員に業務が偏らないよう環境づくりを行う。	①職員が多く入れ替わる中で、高い同僚性を維持していることは評価できる。この意識は今後も継続してほしい。 ②全職員で事故・不祥事防止に取り組んでいることは高く評価する。	①風通しのよい職場環境づくりを実践し、ストレスチェックは75という結果であった。	①職員の働く意欲が湧くよう、衛生委員会を活用して職場環境の改善を図る。同僚性の継続は全員で共有し、実践する。